

2019年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	フェスティバル文化の遺産を検証する －〈移動性〉の観点からの考察－
キーワード	①国際舞台芸術祭、②移動性、③無形文化遺産

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏名	シバタ タカコ 柴田 隆子	所属等	専修大学 国際コミュニケーション 学部 准教授
プロフィール	学習院大学大学院人文科学研究科ドイツ文学専攻で修士号取得後、同大学新設の身体表象文化学専攻に再入学し博士号（表象文化学）を取得。学習院大学・中央大学・麻布大学非常勤講師、東京大学大学院特任研究員などを経て、2018年に同専攻助教に就任。2020年3月に退職し、現在に至る。在学時より舞台芸術批評の執筆活動を行い、SPAC 劇評講座最優秀賞、国際演劇評論家協会（AICT）「シアターアーツ賞」等受賞。2017年より AICT 会員として編集委員会で活動。		

1. 研究の概要

本研究では、固有の文化圏を超えて活用される〈移動性（Mobility）〉をもった文化財へと変化した舞台創作を、近年の国際フェスティバルの影響から検証した。先行理論研究の検討とともに、1年間に一人で行える研究として、舞台芸術フェスティバルの公式ウェブサイトを開催年で年限を区切って抽出した。同サイトにおいて〈移動性〉に関連すると思われる「地域」「言語」に注目し、収集・保存といった文化財の観点も考慮しながらデータ分析を行った。それと合わせ、検証可能な国内で開催される国際芸術祭の現地調査も行った。

2. 研究の動機、目的

都市や国家を表象する「劇場文化」に対し、「フェスティバル文化」が成立する基盤は創作と観客の〈移動性〉にある。開催地の定住者にとっては一過性の消費財に見えるフェスティバルだが、今日、国や地域を越えた一つの文化圏を有し、そこでの「作品」は美学的評価だけでなく経済的効果をも併せ持つ文化財として機能している。本研究の目的は、この文化財としてのフェスティバルの機能と、創作や観客の〈移動性〉との関係を明らかにすることである。欧米では「文化財」は経済的効果のみならずアーカイヴ化することで「文化遺産」となることが意識されている。今をアーカイヴ化することで得られる「文化遺産」の視点が、欧米の国家戦略に結びつくことへの問いが研究の動機にある。

3. 研究の結果

2019年10月1日の時点で国際交流基金「フェスティバル／見本市スケジュール」に掲載された「フェスティバル」の地域分布を見ると、開催総数も年間開催数もヨーロッパが全体の半数を占める。北米と、日本と韓国を主とするアジア、その他の地域が残り三等分する。つまりフェスティバル文化圏とは主として北半球、それもいわゆる先進国をその文化圏とすることがわかった。

国別でみるとアメリカが最も開催数が多いが〈移動性〉には乏しく、それに並ぶドイツ、フランス、イギリスなどのフェスティバルは他国からの招聘アーティストも多く〈移動性〉に富んでいる。言語の複数性は〈移動性〉への指標にはならず、地域言語以外への目配りはそれほど多くなかった。さらに言えば、公式サイトは芸術祭への玄関ではあってもプラットフォームと呼べるような機能をもつものは多くはなく、直近の2018年の情報すらアクセスで

きないものが全体の約4分の1を占めた。アーカイブを意識してコンテンツを充実させているのは、ヨーロッパではドイツ、フランス、イギリスと、アメリカの歴史のある芸術祭のみである。ヨーロッパ勢は拡充された年代から、ユネスコが無形文化遺産を採択したことと連動した文化政策との関係が考えられる。それに対しアメリカは、アーティストや作品のデータベースを拡充させている。この違いは、後世に残していきたい対象が芸術祭そのものか、個々のアーティストや作品かによるものだろう。

公式ウェブサイト进行调查する限り、フェスティバルを文化財や文化遺産と結びつける要素はごく限られた欧州型のフェスティバルにしかなく、〈移動性〉についても欧州域内と一握りの特異なアーティストだけの交流のようにもみえた。このことは個別事例を扱うことの多い先行研究からは見えてこなかった点である。

一方、現地調査を行った国内の6地域7つの芸術祭では、公式サイトでは伺いしれない多種多様な人々が集い語る場が存在していた。とはいえ、フェスティバルという祝祭的な場が生み出す交流は、言説化され記録に残されることはほとんどないこともわかった。また本研究で検証対象としたウェブサイトは、更新の手間のわりに集客力や反響に対する効果がそれほど見込まれない古いメディアとして捉えられ、TwitterやFacebookといったより即時性のあるツールに重点が移っていることも研究を進める過程で見えてきた。少なくとも2019年末時点の本研究の結論は、一部の欧米の歴史あるフェスティバルを除いて、ウェブサイト研究には限界があり、現地に行かなければ〈移動性〉に関する議論はみえてこないというものであった。

しかしながら、コロナの影響が広がる中で2月に開催された横浜や東京での演劇祭は、日々刻々と変化する現状に対応しながら、公式ウェブサイトを基盤にしたオンラインでの「上演」「参加」を促す動きをみせていった。現在、コロナ感染拡大の影響により人の移動が大幅に制限され、国際フェスティバルの多くは開催中止や延期に追い込まれている。本研究が半ば自明のこととして掲げた〈移動性〉は、今一度その定義から再考しなければならないだろう。従来型のフェスティバルの開催は危ぶまれる一方で、ウェブサイトを基盤とした新たな舞台芸術の取組みも始まっており、今後1、2年の動向は注目に値することだろう。それは国家戦略や、文化帝国主義的なものとは異なる、新たな「文化資源」のあり方の提示になるのではないかと予感している。

4. 研究者としてのこれからの展望

今回の女性研究者としての奨励金のおかげで、研究者として自己肯定感をもつことができようになりました。資金的に難しかった遠方へのフェスティバルへの参加も可能になり、その機能のひとつである交流の場に参加できたのは大きな収穫でした。京都の芸術祭に参加した際は、招聘されていたドイツのパフォーマンス集団と話げできたことから、彼らがベルリンで初演予定の作品に研究者として協力する話につながりました。コロナの影響で上演そのものの行方はわかりませんが、このような舞台芸術の現場ともつながる研究を今後も続けていきたいと考えています。

5. 社会に対するメッセージ

今回の研究テーマに掲げた文化における〈移動性〉の概念は、今後加速度的に進むであろうオンライン化の現状にあって、重要なキーワードになると考えています。劇場での公演という従来型の手法を再考しなければならない現在の局面にあって、世界中で舞台芸術は様々な実験を重ねることと思います。本研究で多様な文化圏のフェスティバルを通して舞台芸術のあり様を探ってきた経験から、情報収集とそのアウトプットはかなりの精度でできると自負しています。オンラインでの表現手法やウェブサイトのプラットフォームとしての可能性など、現場に伴走しつつ国内外の情報発信にも努めていきたいと思っています。